

白ちゃん



mikatuki98

右肩上がりで身体がやや左に傾いているからと言う訳ではない。自動車の運転は左折よりも右折の方が面倒だと言う訳でもない。しかし実際、危険を直感で感じ取っているから、磨子はどうしても左折で入ることの出来るスーパーに立ち寄ってしまう。

「……スーパー【丸海屋】は野菜類が新鮮だけど魚介類がイマイチなのよね～ となるとやっぱりアッチに行くしかないよね」

一年前から大分の実家を出て就職の期に福岡市内で独り暮らしを始めた磨子の冷蔵庫の中身は、遂に萎びれかけた野菜と卵だけになり、今日は渋々右折しないと入れないスーパー【グリーンアップル】へ出向いた。

一度目の右折で直ぐに【グリーンアップル】の建物は見えて来る。定休日を記憶していない、と言うよりも覚える気がないのか、右折してからシャッターが見えてガックリしたことが何度あるだろう。だけどもめったに来ないので直ぐに忘れて同じ失敗を繰り返す。

磨子にとって【グリーンアップル】にイマイチ愛着が湧かない理由として、右折が必要だと言う他にも、名前の割には果物類がイマイチだというのがあった。

「ココは魚介類の方が豊富で安くて割と新鮮なんだから、名前も海の竜宮に因んで【リュウグーフレッシュ】とかにすればイイのに…… 略してリュフレ！ インフレでもデフレでもないよ、リュフレ！ はははイイんじゃないかあ～い？」

磨子はいつもそんな寒い独り言をつぶやきながら【グリーンアップル】の地下駐車場へ左折して入る。ところが今日に限って左折する直前、チラリと目に入った来た小さな出店があった。

「ん！？ 何？ 鯛焼き？ たいやき、おーたいやきったい！」

磨子福岡で就職して覚えた方言で叫んだ。そして買い物が済んだらココに鯛焼きを買いに来ようと心に決めた。

「たいやき たいやき……っと。お母さんはいつも黒あんだったよね。で、お父さんはあんこ類は嫌だからって皮だけ食べて…… お坊さんのくせに食べ物を粗末にするなんて勿体無いてわたしがいつも怒ってたのよね。んで、わたしは絶対、白あん！ やっぱ、あんこは白が一番だよ～ ふ・ふ・ふ」

磨子はいつから鯛焼きが好物になったのか、久しぶりに見るせいか、今日はやけに鯛焼きに浮かれ気分だ。そして買い物を済ませると地下駐車場に車を止めたまま財布だけを握り、地上へ出た。

「いらっしゃいませ！」

「……う～んと、黒アン2つと白アン……3つ下さい！」

磨子は鯛焼き屋の小さな窓の前に立ち、カウンターに貼り付けられたメニューを見ながら注文した。注文した直後にチョコレートだの抹茶だのカスタードクリームだの、10円増しのメニューが目に入ったが、どうしようかと考えているうちに、注文した鯛焼きが入っているだろう乳白色のビニール袋を差し出された。

『ま、いっか。 白あん白あん』

店員に言われたままの金額を支払うと、磨子は再び地下の駐車場へ歩いて戻ろうとしたその時だった。 小さな女の子が突然、大きな声で叫んだ。

「しろ——！ しろ——！」

磨子は咄嗟に辺りをキョロキョロと見回し、「しろ——！」と呼ばれている犬を探した。
『わんちゃん？ ん？ どこどこ？ 白ちゃんはどこ？』

しかし女の子の呼びかけにも係わらず、何も現れなかった。

『白ちゃん、どこいっちゃたんだろうね…… うちの白ちゃんもよく家出してたけど…… 家出すると保険所の人に連れて行かれるから、あの頃ホント心配したよね～』

磨子の頭の中の〈しろ〉は、すっかり小学生の頃実家のお寺で買っていた犬の〈白〉になっていた。

犬の〈白〉のことを気にしながらも、地下駐車場へ戻って車に乗り込んだ磨子。

「わあ～い、鯛焼き買ったど～」

確かに磨子にとっては久し振りに食べる鯛焼きだ。 しかし何でこんなにはしゃいでいるのか磨子にも判らない。 ただ磨子の脳裏には、あのキツネ色をした鯛焼きの姿がずっと浮かんでいる。

「白ちゃ～ん 鯛焼き買って帰るよ～」

帰宅した磨子の独り部屋では、今は亡き犬〈白〉の代わりにハスキーのぬいぐるみの同じく〈白ちゃん〉が出迎えてくれた。

「白ちゃん、ただいまあ～ あのねえ～ 今日は鯛焼きを買って来たんだよお～ 一緒に食べようねえ～ ……あっ！ 白？ 白い？？ ええ～～～白い鯛焼き？？？」

キツネ色だと思い込んでいた鯛焼きは白い鯛焼きだ。

「……へ？ もしかして焼きが甘いとか？」

恐る恐る一口食べた磨子の口の中はやけに粘る。

「ネチネチネチ……？ いや、モチモチモチだ！」

なんと、この店の鯛焼きはモチモチ素材の生地を使った白い鯛焼きだったのだ。 そしてケースには〈鯛焼きの白屋〉というロゴが貼られていた。

「……てことは？ あの女の子が呼んでいたのは？ 犬じゃなくて？ 鯛焼き屋の名前？ だったんだあ～～～！ なあ～んだ。 白い鯛焼きのしろ——だったんだ。 きっと親に白い鯛焼き買って買ってコールだったんだ。 ふっ。 なあ～んだ…… あ、でも女の子も白あんが好きでしろーって言ってたのかなあ～？ ねえ白ちゃん、真実はどうなんだろうね？」

小さな謎を残しつつも、ちょっとだけキツネ色の鯛焼きを食べたかったな、と思いながら、ぬいぐるみの白ちゃんを抱きかかえたままの磨子は、白あんの白い鯛焼きを続けて2つ食べきったのだった。

え？黒アンはどうしたかって？ 多分明日、職場の同僚にあげるんじゃないかな。 甘党イケメンの白崎君にね。 了